01-048

発達障害児に対する感覚統合療法の効果研究

森川 芳彦¹⁾、谷口 恵美²⁾、安井 美佳²⁾、平林 早也果²⁾、吉村 学²⁾、鶴藤 彩²⁾、山崎 吏奈²⁾、西田 智子³⁾

専門学校川崎リハビリテーション学院 作業療学科¹⁾、川崎医科大学附属病院リハビリテーションセンター²⁾、香川大学教育学部³⁾

はじめに：現在、病院では発達障害児に対して感覚統合療法（以下、SIT）が行われている。しかし、日本における効果研究は事例研究が多く、比較試験はIwanagaら（2013）の研究があるのみである。今回、非ランダム化比較試験により発達障害児におけるSITの効果を感じ覚機能、身体図式、行為機能において検討した。

方法：対象は自閉スペクトラム症などの発達障害の診断を受けた児とした。コントロール群は療育機関に通う児であり、介入群は病院にてSITを受けている児とした。介入前に簡易版JPAN 感覚処理・行為機能検査（以下、S-JPAN）、日本版感覚プロファイル短縮版（以下、SSP）やグッドイナフ人物画知能検査（以下、DAM）を行った。SITは月2回の頻度で、40分間/回実施した。訓練期間は10カ月で、合計時間は13時間を目安とした。コントロール群は研究者が研究協力機関に訪問し同一の検査を実施した。療育機関ではソーシャルスキルトレーニングなどの療育を1・2回/週の頻度で10カ月間受け、SITの実施はなかった。その後、各群とも介入前と同一の検査を実施した。対象児の保護者には口頭と文書にて説明し同意を得た。本研究は当院の倫理委員会の承認を得た（承認番号2755-1）。

結果：対象児の人数はコントロール群7名、介入群8名であった。介入前の平均年齢はコントロール群が6.3 ± 1.4歳、介入群が6.3 ± 1.2歳であった。統計処理はWilcoxon符号付順位和検定にて行った。SSPはコントロール群では前後比較で有意差を認めなかった。介入群では介入後に有意に低下した（ $p < .05$ ）。DAMはコントロール群では前後で有意差を認めなかった。介入群では介入後に有意に向上した（ $p < .05$ ）。S-JPANはコントロール群では目と手の協調性の検査のみ有意に低下した（ $p < .05$ ）。介入群では姿勢の検査において有意に向上し（ $p < .01$ ）、識別性の触覚、肢位模倣、両手の協調性の検査においても有意に向上した（ $p < .05$ ）。

考察：今回のSSPやDAMの結果よりSITは感覚機能の改善や身体図式の向上に効果があったと考えられた。S-JPANにおいて肢位模倣、両手の協調性の数値が向上したことから行為機能についても効果があったと考えられた。今後、サンプルサイズの拡大、対象疾患の均一化を図り、ランダム化比較試験の実施を検討したい。

01-049

親の養育スタイルと子どもの行動特性との関連—健常児と障害児の比較から

浅野 大喜

日本バプテスト病院 リハビリテーション科

【目的】親の養育態度と子どもの行動は、双方向に影響を与えることが明らかとなっている。本研究の目的は、障害児の親の養育スタイルの調査と、親の養育スタイルと子どもの行動特性との関係について調べることである。

【方法】身体障害や知的障害、発達障害を有し、当院で外来リハビリを実施している障害児の親35名（以下、DD群：母親29名、父親6名）と定型発達児の親87名（以下、TD群：母親52名、父親35名）の計122名を対象に、養育行動についての質問紙である「日本語版養育スタイル尺度」（以下、PSDQ）と子どもの行動特性を評価する「子どもの強さと困難さアンケート」（以下、SDQ）の回答を求めた。PSDQは指導的、権威主義的、許容的養育スタイルについて各々平均値を算出した。SDQは行為、情緒、多動不注意、仲間関係の問題行動と向社会性について点数化された。得られた結果に対し、2群間および父母間の各養育スタイル尺度得点の比較と、親の養育スタイルと子どもの行動特性の相関分析を実施した。統計学的有意水準は5%とした。

【結果】全体の分析では、親の年齢が高くなるほど許容的養育は高くなっていった（ $\rho=0.42$, $p < 0.01$ ）。子どもの年齢と養育スタイルの間に有意な関係はなかった。母親と父親の比較では、母親は父親よりも指導的養育が高かった（ $p < 0.01$ ）。2群間の比較では、DD群はTD群と比べて権威主義的養育が高かった（ $p < 0.05$ ）。指導的、許容的養育に有意差はなかった。また群別の養育スタイルとSDQの相関分析の結果、DD群では権威主義的養育と行為の問題（ $\rho=0.55$, $p < 0.01$ ）に正の相関関係を認め、TD群は指導的養育と情緒の問題との間に負の相関関係（ $\rho=-0.31$, $p < 0.01$ ）、権威主義的養育と仲間関係の問題との間に正の相関関係（ $\rho=0.23$, $p < 0.05$ ）が認められた。

【考察】親の年齢が高くなると許容的な養育が高くなることは、年齢とともに寛容な態度となっていると考えられた。また父親よりも母親の指導的養育が高いことは、普段子どもと過ごす時間や機会の多さが関係している可能性が考えられた。障害児を養育する親は厳しい養育態度となっており、これは行為の問題行動と関連していることが明らかとなった。また定型発達児の親の養育態度は子どもの社会性の影響を受けやすいことが示唆された。